

むかし、あるところに、貧乏な夫婦ふうふがいました。夫婦は、いつも、ごたごた、けんかばかりしていました。

あるとき、夫婦は、こう貧乏では仕方しかたがない、住むところを変えてみようと考えて、引越こしすることになりました。そこで、ぼろを着ていては外へも出られないからと、着物をこしらえました。ところは、おやじさんの着物のかたほうの袖が、いくら探しても見つかりません。しかたがないので、かた袖だけの着物を着て出かけました。

川まで来て、渡し船に乗りました。すると、渡し船の船頭せんどうが、

「もしもし、あんたがた。どこそこのなに兵衛べゑさんではないか」とききました。

「うん、そうじゃ」というと、

「このかた袖はあんたのじゃないか」といって、かた袖を出しました。夫婦はびっくりしました。

「それはそうだが、なんであんたが持っているんだ」

すると、船頭が、

「じつは、たった今、ひとりの男がこの渡しを渡ったんだ。そいつが、『わしは貧乏神だ。今まで、どこそこのなに兵衛の家におったが、今度引越すというので、わしが先に立って出てきた。わしは、貧乏で、船の渡し賃ちんがないから、すまんが、これを足たしにしてくれ』といつて、このかた袖をくれたんだ。見ると、あんたが同じがらの着物を着ているし、かた袖がないから、ひよつとしてと思って聞いてみたんだよ」といいました。そして、

「あんたら、これからすぐに家に帰るのがよかろう。貧乏神の話では、いつも夫婦げんがばかりしとるそうだが、これからは、けんかせずに笑わらって暮くらすがいい」といつてくれました。

そこで、夫婦は、さっそく前の家にもどつて、仲なかよく暮らすようになりました。

しばらくすると、貧乏神が引き返してきました。けれども、夫婦が仲よくて入りこむすきがありません。貧乏神は、とうとうよそへ行ってしまいました。

夫婦は、それから、たいそうな金持ちになったということです。